

# 明清会館組織の研究動向について

張 九 龍

は じ め に

会館組織は明代の北京で初めて現れ、明の武宗（1506-1521）になると全国各地で建設されるようになった。清朝の安定期に入ると経済が著しく発展し、商業ギルド会館が大いに発展した。アヘン戦争の後、門戸開放と共に会館は欧米へ進出するようになった。こうした、会館組織に関する研究が1900年代初期から始まり、社会的側面から商業ギルドや科挙などの側面まで幅広く研究されてきた。その会館組織をいち早く注目したのが欧米の学者だった。欧米では、会館組織を欧米のギルド組織（業縁性組織）として捉え、専ら社会と経済に着目して研究した。また、理論的な枠組みを重視した上で、中国社会や経済の全体像をとらえながら会館の位置づけを検証した。その後、日本の学者は現地調査をし、莫大な一次史（資）料を集め、これらをもとに中国会館史について考証した。但し、当時の調査目的は主に商業会館だったので、結果として商業的な側面が強調されていた。また、中国も1950年代頃以前の会館組織はギルド組織として捉えられ、研究の中心は商業公所だった。

一方、会館組織は極めて複雑な組織であった為、商業ギルド的な側面だけでは説明つかない問題が存在していた。1950年代以降、同郷人組織として捉えられ研究が進められてきた。これによって、会館組織の形成は人口移動と関わっていることが明らかになり、新たな研究方向を示した。人口移動というのは2つのパターンがあり、一つは自然災害や戦乱の中で生存するために自発的な人口移動、もう一つは政治勢力の遷移ないし国家戦略による強制的な人口移動である。いずれにしろ、人口移動によって人々は新しい環境に踏み入れ、生ま

れ育った生活習慣・価値観・信仰・方言といったものが著しく変化し、故郷への帰属感が自然的に生まれ、郷土概念が現れ始めるのである。従って、会館組織はこの様な郷土概念のもとで形成されていくのであることが明らかになった。

つまり、会館組織は郷土概念のもとで形成された社会組織であり、後の社会や経済等様々な事情によって、会館組織は同郷人の便宜を図る為に諸機能性を備わるようになった。例えば、明代科挙試験が定着された以降、会館を利用して同郷人の為に宿を提供することが盛んに見られた。また、明代の半ばから清代にかけて商業が盛んになった際、会館組織は商人或いは商業とのかかわりが多くなり、会館建設が著しく発展した。この様に、会館組織の機能はかなり変化するが、同郷人によって結合されていくことが一貫して存在している。

## 1. 商業ギルド的観点の研究

1950年代以前は会館組織を欧米の商業ギルドとして捉えて研究するのが一般的であった。日本の学者根岸信は「中国では、古くから血縁のないもの間に、相互の生活を保護する為の組合を造る事が行われた。後世に至るに従い、同郷・同業・同階級のもものが、特定の目的を達成する為に盛んに造り、その内最も重要なものは会館また公所と称する工商、特に商人を成員とする同郷または同業の組合である。この様な組合は利益を保護増進する他、吉凶禍福を共にして同胞的誼も存在すれば、神を祈り、丙舎や墓地を備えている。更に、相互扶助も行い、成員の生活全体を支配内に包摂され、全く独立とした自治団体であって、裁判もすれば、その処罰もする、また往々に市政を左右し、進んで内治外交まで干渉することもあった。中世ヨーロッパの社交親睦・宗教礼拝・相互扶助を目的とするギルド組織と類似しているため、比較研究することに至った。」<sup>(1)</sup>と述べている。ここでは、ギルド的存在とする研究につき、欧米・日

---

(1) 根岸信『支那ギルドの研究』（斯文書院、1932年）総論、1-2頁。

本・中国の3つに分けてそれぞれ重要な先行研究についてまとめておきたい。

(1) 欧米では D・J・Macgowan 氏が中国の商業ギルド組織について書かれた物が最初の研究だと考えられる。彼はアメリカの宣教師で、1843年に中国の寧波で医者として活動し、1879年に中国海関総稅務司 Robert Hart の委任を受け、温州の海関の任幫兼医者として任職され、1893年に上海で死去した人物で、寧波と温州の商会 (Chambers of Commerce) と工会 (Tracle Llnion) についてそれぞれ考察した。但し、彼の英語版論文は絶版になった為、日本では入手困難であって、幸い 1995年彭澤益主編『中国工商行會史料集』の中で彼の論文を中国語に全訳<sup>(2)</sup>をしていたので、確認することができる。しかし、元々の英語版論文で使っていた史料の多くは中国古典語であって、当然翻訳する際多少のずれが生じていた。さらに、彭澤益が英語から中国語に翻訳したので、重ね重ねして、大きなずれが生じてはいる。

また、H・B・Morse 氏は 1874年ハーバード大学を卒業した後、中国海関に就職し、1909年に退職した後は、中国の対外關係史・經濟史について数多くの論文を書き遺した。彼は中国の手工業行會の起源から入手し、行會の成員・政府との關係・収入・崇拜等の側面から欧米と中国の行會について比較しながら研究した。上海・寧波・温州の手工業行會について調査し、行會成員の仲裁・會館が貿易に対するコントロール等について研究した。また、漢口・寧波・温州・上海・蘇州等の商業會館及び行規の執行狀況について考察し、商業會館と中国政府・外国商業の紛争事件について述べていた。これらの研究は欧米人の視点から中国手工業行會・商業行會及び會館について検証したもので、的確でない所もあるが、貴重な參考資料として無視できない。

Morse 氏の研究は中国沿岸部の商業ギルド行會に関するもので、引用していた史料も二次の物が多く、内部構造に関する考証は欠けていた。また、地方の手工業行會を対象としていた為、極めて地方性の高い組織研究となり、組織

---

(2) 彭澤益主編『中国工商行會史料集』(中華書局, 1995年) 2-51頁。

の全体像或いは起源について明らかにされていなかった。

一方、J・S・Burgess氏は北京のギルドに関する研究を論じた。彼は北京で10年ほど暮らしていて、当時北京燕京大学社会学の副教授だった。1927年にアメリカへ戻り*The Guilds of Peking*の執筆に携わったが、実はそれ以前に彼とS・D・Gambleが共同研究で*Peking: A Social Survey*と題した著書が既に出版されていた。

Burgess氏自身の*The Guilds of Peking*は北京にある42か所のギルド組織を取り上げ、質問書によって得た申告に基づいて調査した。中国人の友人が質問書を慎重に中国語に訳し、当時のギルド組織を運営する人或いは会員にこれを書かせた後、内容を分析・分類したのが特徴である。しかし、これは当時の中国ギルド組織研究には貴重な資料になるかもしれないが、組織の歴史的研究にはあまり役に立たない。また、Burgess氏の著書には北京ギルド組織の歴史についてあまり述べていなかった。

以上の様に、欧米の先行研究では大いに商業ギルド的な研究が進んで居るが、組織の断代について殆んどまとめておらず、系統的な図式もあまり見られなかった。恐らく、当時の欧米では中国社会の認識がさほど無かったし、研究するに当たって、現存の物を取り上げることしかできなかった。また、注目的は全て手工業行会或いは商業ギルドにあり、会館組織の専論が無かった。

(2) 日本では会館組織の研究がかなり進んでおり、根岸佶氏をはじめ多くの研究成果を成し遂げていた。根岸佶氏は中国のギルド組織を同郷団体と経済団体の2つに分けて考証した。その内、同郷団体は商業の為の会館について取り上げ詳しく論じられた部分で、経済団体は主に商業その物の経営と目的について論じられた部分である。また、彼は『上海のギルド』や『中国のギルド』といった著書もあるが、両者いずれも『支那ギルドの研究』の補正的なもので、中にはかなり重なる部分も存在している。その所以について、根岸佶『上海のギルド』の中で以下の様に述べている。

余は久しく中国经济事情を調査し、その序にギルドに関する資料をも蒐集

した。昭和七年これに基き内外図書を参考し、『支那ギルドの研究』と題する一書を公刊した。これはある事情に依り出版を急いだので粗笨観るに足るべきものでない。爾来之を改造せんがため所在につき資料の蒐集に努めたが、そのうち上海に於ける収穫多かつた。又拙著出でてから、仁井田陞、内田直作、清水盛光諸氏の力作輩出した。此等の著書を検討し、新旧資料を調整し、改めて中国ギルドを書にせんとせば、龐大なれ数冊となるべき虞れがある。それで古ギルドに属すべきものを除き、会館、公所、公議会、同郷会の四つの外、別に、中国ギルド化した商公両会を選び、刊行せんとしたが猶ほ一千二百頁に達する。出版界の大不況殊に中国に関する著書の顧みられざる時代、かかる大冊を引受くる書肆のないこと言ふを俟たぬ。幸に諸友の尽力に依り文部省より格外的恩典を以て過分の出版助成金を下附せられたのと、日本評論社の特別なる厚意とに依り、小冊子を公刊することを得た。それで既成の原稿より上海に於けるギルドのみを抽出し、そのうち重要なもの八つを選び、別に総説と結論を加へ、『上海のギルド』と題した。<sup>(3)</sup>

仁井田陞氏が北京での現地調査により多くの一次史（資）料を入手した。彼の『中国の社会とギルド』は彼自身によって3回にわたって（1942・1943年の夏と1944年の秋）の調査総括である。その中で会館については以下の様に書かれていた。

同業の会館は、つまりヨーロッパのギルドでの **Gildhall** に相当するものであって、ギルドの事務を取り扱う辨公處（事務所）であり、ギルド員がここで集会乃至宴会を開く集会所交驛場所であり、ときに仲間の子弟の学校ともなると同時に、神殿（佛殿）であり、演劇（歌劇）の舞臺が置かれてある。ギルド祭典の日には、この会館で集会祭典演劇宴会が共に行われ

---

(3) 根岸信『上海のギルド』（日本評論社、1951年）3-5頁。

る。(4)

仁井田陸氏はその後、より詳細な調査史料を『北京工商ギルド資料集』として刊行され、調査で得られた大量の碑刻資料と編者の考証・訳注なども加わり、会館研究に不可欠な史料集となった。それ以外に、和田清氏は、会館組織の起源について唐宋には既に存在しており、唐の「行」は会館組織の起源であると提唱したが、実質彼も会館は商業的存在として認識していた。つまり、欧米の研究者が先立って中国の会館組織を商業ギルドとして捉えていた為、日本も多少なりその影響を受けていた。結果的に、日本も会館組織を商業ギルドの中に取り込んで研究する傾向が強かった。

(3) 中国の会館組織研究は比較的遅く、総じて会館を独立とした組織として捉える傾向にあった。鄭鴻笙氏<sup>(5)</sup>の論文は中国で初めての会館組織研究とされている。鄭氏は中国の会館・公所は他の社会組織と違って、会館・公所が所属している会員或いは特定の人からお金を徴収し、基本金として祀りことや宴会・援助の支出として使う。一方で、営利事業を行わないのがその特徴であり、つまり会館・公所は財団と公益団体の二重性をもっていると述べた。ただ、この論文は当時中華民国の会館・公所の実況について書かれていたもので、会館の遷移と発展についてはあまり触れていなかった。

また、全漢陸氏が国立北京大学歴史学部に在学していた際に発表した論文では、中国行会の起源とその遷移について考証した。彼は中国の行会を「手工業技術的血縁団体」<sup>(6)</sup>として捉え、古くから既に存在しており、隋唐には「行」として確立され、宋代になると発達した。また、明代の会館組織についても論証したが、彼は会館組織が南宋から既に存在していたと述べ、会館組織が商業的な存在として捉えていた。また、中国近代の手工業と商業行会及び苦力につ

---

(4) 仁井田陸『中国の社会とギルド』（岩波書店、1951年）121-122頁。

(5) 鄭鴻笙「中国公商業公会及会館、公所制度概論」『国聞周報』巻2、第19期、1925年5月。

(6) 全漢陸『中国行会制度史』（新生命書局、1934年）9頁。

いても論じた。

それ以外に、彭澤益『中国近代手工業史料集』は1840年から1949年までの紡織・纈絲・陶磁・造紙・製塩・茶・土木建築の発展について論じた。また、彼の『中国工商行会史料集』は前半部分に欧州の先行研究の紹介と地方志の中に商工会館に関する記録をまとめた上、工商業会の規則を幾つか紹介した。後半は通商港口の調査報告と手工業の新聞記事をまとめた。

以上、会館組織を欧米の商業ギルド組織として捉えて研究することは枚挙の如きである。これらの先行研究は比較的に重要なものとして知られ、今日の会館組織研究に多大な影響を与えていた。しかし、これらの研究は主に欧米の商業ギルド的な視点から考察したものである。会館組織は商業ギルドの一環として触れられることがあるが、専論としてのものが殆んど無かった。

## 2. 同郷人組織的観点の研究

今日では、中国の社会組織を研究するに当たって、同郷人結合の存在がかなり注目される様になったが、前述の様に1950年代頃までには同郷人の存在があまり注目されてこなかった。そんな中で、いち早く同郷人に注目したのが日本の学者加藤繁氏である。彼の論文は、まず欧米の研究について批判した。欧米のギルドというのは会館ではなく、中国の「行」に当たると論証した。会館は明代嘉靖・隆慶以後に北京で同郷人官僚・士子のために休憩或いは集いの場として設けられたもので、その後商人が模倣して中国各地で商業会館として建てるようになったと述べた。これは日本において初めて欧米のギルド組織と中国の会館組織が違うものであることについて論じたものであった。また、**John King Fairbank** 氏も会館とは元来科挙試験のために官僚士大夫が建設したものであり、後に商業が発展してくると、商人たちもそれを模倣して会館を建設し、同業間の繋がりを連絡するための互助組織としたとする。但し、両者とも会館組織は欧米の商業ギルドと違うものであることについて批判したが、より詳細な議論展開が無かった。

一方、中国の竇季良氏は初めて同郷人と会館組織の関係について論じたのである。彼は異郷の地で同郷人により結合された社会組織が会館ないし同郷会としたとする<sup>(7)</sup>。竇氏の研究は同郷人組織研究の土台を築き上げたと同時に会館組織研究の新たな視点を示唆した。但し、彼の調査と研究対象は中国各地の人が重慶市でつくられていた各自の省・府・県同郷・会館組織であって、北京と沿岸部の会館組織は視野に入れていなかった。従って、会館組織の全体像はあまり捉えられていなかったのである。

その後、何炳棣氏は初めて会館組織を独立した組織として取り上げて研究した。彼は会館組織が地縁性組織として認識した上で、会館の成立年代・会館と中国籍貫概念・地縁的組織との関係について詳しく分析し、会館組織の分布及び数も考証した。何氏は会館組織が永楽年間（1402-1424）到北京で初めて創られていた組織であることを提示した。何氏の研究によれば、会館組織の成立は中国の籍貫概念という大きな背景にあり、また籍貫概念のもとで同じ方言・信仰・文化を持つ地域の中で郷土概念という極めて強い意識形態が形成されていくのであると提示した<sup>(8)</sup>。この様な郷土概念が新しい生活環境へ遷った際に現れ、組織化されるのが会館組織である。従って、永楽年間の遷都によって南部出身の官僚たちが北部へと移されることによって会館組織がつくられていたのである。

但し、何氏が会館組織の年代考証する際に使っていた史料は民国八年の『蕪湖縣志』<sup>(9)</sup>であり、史料自体はかなり新しい物で、その信憑性を問われる余地があるという異論を唱える研究者もいるが、後の研究者王日根氏は『蕪湖縣

(7) 竇季良『同郷組織之研究』（正中書局、1945年）序言、2頁。

(8) 何炳棣『中国会館史論』（台湾学生書局、1966年）1-9頁。

(9) 余誼密等修・鮑實等纂『蕪湖縣志』民国八年石印本；卷十三・建置志・會館「京都蕪湖會館、在前門外長巷上三條衙衛。明永樂間、邑人俞謨捐貲購屋數椽、并基地一塊創建。」又、卷四十八・人物志・宦績六「俞謨、字克端、永樂元年選貢、任南京戶部主事轉北京工部主事。在京師前門外置旅舍數椽并基地一塊、買自路姓者、歸里時付同邑京官晉儉等爲蕪湖會館。」（『中国地方叢書・華中地方・安徽省』第88号、成文出版社有限公司印行、1970年に所収）

志』以外に、『浮梁縣志』<sup>(10)</sup>・『重修広東旧義園記』<sup>(11)</sup>も会館組織は永楽年間につくられていたと書かれていることを新たに発見した<sup>(12)</sup>。従って、現在では永楽年間起源説がほぼ定説となっている。

更に、何氏の研究によって、商業ギルド組織と会館組織の相違が明確化され、会館組織研究の新たな方向を示したのである。それ以来、会館組織研究が盛んに行われる様になり、1982年呂作變氏<sup>(13)</sup>は初めて、会館組織と商工会館との相違について論じた。2年後の1984年に「南京会館小志」を発表し、「行」はヨーロッパの商業ギルド組織にあたるが、しかし会館はそれと別の組織であると述べた。また、会館組織を3つに分けることができると提示した。第一、官僚士大夫或いは科挙試子が利用する会館である。第二、仕商会館、即ち官僚と商人が共に建設する会館である。第三、商人会館、工商業者によってつくられた会館である<sup>(14)</sup>。この「南京会館小志」は主に南京にある会館或いは南京の人が他の所で作った会館について論じたものであるが、この様に会館組織を分類することが会館組織研究に大きなインパクトを与えた。

また、周宗賢氏はより詳細に、会館組織の由来・沿革・範囲・種類・経費・組織・事業について再確認した上で、台湾の会館組織についても論じた。周氏の著書には台湾にある会館の写真を多く使用していた為、読者に鮮明な印象を与えた。また、これによって、中国本土以外の会館組織の存在が示され、注目を集めた。

王日根氏の研究では、何炳棣氏の研究を補足した上で、会館組織の様々な側

---

(10) 程廷濟修『浮梁縣志』乾隆四十八年；卷二・建置志「北京正陽門外東河沿街、背南面北、其一在右、明永楽間邑人吏員金宗舜鼎建、曰浮梁会館。」（江西省地方志編纂委員会辦公室・景德鎮市県（市）志編纂、2015年）

(11) 鄧華熙撰・羅惇衍行書『重修広東旧義園記』同治七年「京師廣渠門内卧佛寺迤東、粵東旧義園在焉。歲久園無隙地、復購新義園、故此園以旧称園。故明時會館永楽間王大宗伯忠銘、黎銓部岱与楊版曹庐山所倡建、顔其堂曰：嘉会。」（北京市档案館編『北京会館档案史料』北京出版社出版、1997年に所収）

(12) 王日根『郷土之鏈：明清会館与社会變遷』（天津人民出版社、1996年）32頁。

(13) 呂作變「明清時期的会館并非工商業行会」『中国史研究』第2期、1982年。

(14) 呂作變「南京会館小志」『南京史志』第5期、1984年、42頁。

面について論じた。第一章は会館組織の概念を定めた上で、会館は明代半ばに現れ、主に官僚間の集い場として発展して行く。清の咸豊（1851-1861）・同治年間（1862-1874）に最盛期を迎え、その後海外へ進出するようになり、今日に至って存続し続けている。第二章は明清の人口流動・科挙制度の発展と会館組織の関係について述べた。特に組織の構造・運営・内部関係・経費の支出について考察した。第三章では「士農工商」の階級関係について考察し、会館の内部には祀神・合樂・義挙・公約4つの特徴があったと突き止めた。第四章では会館と文化の相互関係について、建築物としての会館、地方文化交流にどのような役割を果たしたかについて述べた。王氏の研究によれば、会館組織は明代の中期から始まり、明代の後期から清代の咸同年間まで最盛期で、清代末に衰退した。その分布については、東南沿岸・内陸沿河部が多く、西部が少ない。種類として、商工会館・移民会館・官紳会館の3つに分類することができる。機能については、祀神・合樂・義挙・公約の4つに分ける事が出来る。文化的側面には、沿岸部と内陸・士紳と庶民の融合が見られ、新しい会館文化を生み出している。

以上、会館組織は同郷人団体として捉えての研究について述べた。特に優れていたのが何炳棣の研究であり、彼は初めて会館組織の起源及び全国の分布状況について論証し、後の会館研究に新しい方向を示した。その後、王日根氏は今までの会館研究について改めて考証し、会館組織研究にとって不可欠な著書を書き残したのである。また、これらの研究成果のもとで、会館組織と科挙制度・郷紳文化の関係についても注目されるようになった。最後に、20世紀半ばから中国では会館組織に関する碑刻史料の整理・出版を行い、数多くの重要な碑刻史料集を世に出したのである。例えば、『江蘇省明清以来碑刻資料選集』・『明清以来北京工商业会館碑刻撰編』・『明清蘇州工商业碑刻集』・『上海碑刻資料選輯』・『明清佛山碑刻文献經濟史料』などの物がある。これらの史（資）料の整理には今日の研究にとってかなり重要な手がかりとなっている。

## 終 わ り に

本論は会館組織に関する先行研究についてまとめてきた。もちろん全ての研究を網羅する事は出来ないが、比較的重要な先行研究について紹介した。欧米の場合は会館組織を単独の組織として研究することが殆んどなく、ギルド組織の一環として取り上げる事が多い。また、ギルドとしての研究については社会・経済的な遷移という側面を注目されてきた。一方で、研究方法として方法論的な議論展開へもっていく傾向が強く見られるのが特徴である。日本では、現地調査（特に北京）による莫大な一次史（資）料を集めた上で会館史を考証するのが特徴である。欧米と日本のいずれも商業ギルド（手工業組織・業縁性組織）を中心に研究して来たが、会館もその一環として取り込まれていた為、会館自体に関する研究が少なかった。20世紀半ば頃から会館を注目するようになり、一つの社会組織として認識するようになった。また、近年では建築物としての会館や紳士・士大夫との関係も注目され、会館組織の全体像が徐々に明らかになりつつある。

私は会館組織が著しく発展出来たのは明代の科挙制度と大きく関わっていると考えている。明代の科挙試験は取士の為の科挙制度と養士の為の学校制度を一体化したのが特徴であって、これによって官僚本籍概念が現れる様になった。そして、官僚本籍概念のもとで官僚間に地域性派閥が形成されるようになった。この官僚派閥が真っ先に会館組織の建設に力を注いでいた。なぜなら、在朝官僚が同郷人の権威を作り上げる為に、会館組織を通じて地元の科挙受験生に様々な便宜を図るためである。また、解任した後の官僚が地元での身分が高まり、郷紳へと発展した。寺田隆信の研究によれば、明代の科挙が養士の機関である学校を制度的に組込んだことは、取士と養士を結合させたのである。これは明代郷紳階級の形成の基本的要因であると述べた<sup>(15)</sup>。

---

(15) 寺田隆信『明代郷紳の研究』（京都大学学術出版会、2009年）6-9頁。

今後は、科挙制度と郷紳を視野に入れて研究する必要があると感じている。また、私は会館組織がソシアビリテ的な存在として捉えるべきだと考えている。会館組織の結合は極めて複雑で、地縁（出身）・職業・信仰・共属意識（言葉、習俗、価値観）等があり、その上で社会の変遷や地域差異・文化の影響も受けながら発展して行く組織である。従って、会館組織を研究するに当たって、同郷人的結合を注目しながら、ほかの側面も視野に入れて考察する必要がある。

### 参考文献

#### I 英語文献・論文

- D・J・Macgowan. Chinese Guilds or Chambers of Commerce and Trades Unions, *Journal of North - China Branch of the Royal Asiatic Society*, VoL.21, no.3, 1886.
- H・B・Morse. *The Guilds of China*. London, 1909.
- J・S・Burgess and S・D・Gamble. *Peking: A Social Survey*. New York, 1921.
- J・S・Burgess. *The Guilds of Peking*. New York, 1928.
- John King Fairbank. *The Cambridge History of China*. v.10: Late Ch'ing, 1800-1911, pt.1, Cambridge [Cambridgeshire]: Cambridge University Press, 1978.

#### II 日本語文献・論文

- 根岸佶『支那ギルドの研究』（斯文書院、1932年）
- 根岸佶『上海のギルド』（日本評論社、1951年）
- 根岸佶『中国のギルド』（日本評論社、1953年）
- 仁井田陸『中国の社会とギルド』（岩波書店、1951年）
- 仁井田陸輯『北京工商ギルド資料集』（東京大学東洋文化研究所附属・東洋文献センター刊行委員会 1975年）
- 寺田隆信『明代郷紳の研究』（京都大学学術出版会、2009年）
- 加藤繁「唐宋時代の商人組合「行」を論じて清代の會館に及ぶ」『三田史学会』巻14, 第1号, 1935年。
- 和田清「公所会館の起源に就いて」『史学雑誌』巻33, 第10期, 1922年。

## III 中国語文献・論文

- 竇季良『同郷組織之研究』（正中書局，1945年）  
何炳棣『中国會館史論』（台湾學生書局，1966年）  
彭澤益主編『中国工商會史料集』（中華書局，1995年）  
彭澤益編『中国近代手工業史料集』（三聯書店，1957年）  
全漢陞『中国行會制度史』（新生命書局，1934年）  
王日根『郷土之鏈：明清會館与社会變遷』（天津人民出版社，1996年）  
周宗賢『血濃于水の會館』（台湾行政院文化建設委員會印行，1982年）  
呂作變「明清時期的會館并非工商會行會」『中国史研究』第2期，1982年。  
呂作變「南京會館小志」『南京史志』第5期，1984年。  
鄭鴻笙「中国公商業公會及會館，公所制度概論」『國聞周報』卷2，第19期，1925年5月。

## IV 中国語史料・碑刻集

- 程廷濟修『浮梁縣志』（江西省地方志編纂委員會辦公室・景德鎮市景（市）志編纂，2015年）  
鄧華熙撰・羅惇衍行書『重修廣東旧義園記』同治七年（北京市檔案館編『北京會館檔案史料』北京出版社出版，1997年に所収）  
廣東省社会科学院歴史研究所中国古代史研究室等編『明清佛山碑刻文献經濟史料』（廣東人民出版社，1987年）  
江蘇省博物館編『江蘇省明清以来碑刻資料選集』（三聯書店出版，1959年）  
李華編『明清以来北京工商會館碑刻選編』（文物出版社，1980年）  
劉侗・于奕正編『帝京景物略』（北京古籍出版社，1983年）  
蘇州歴史博物館編『明清蘇州工商業碑刻集』（江蘇人民出版社，1981年）  
上海博物館圖書資料室編『上海碑刻資料選輯』（上海人民出版社，1984年）  
余誼密等修・鮑實等纂『蕪湖縣志』民国八年石印本（『中国地方叢書・华中地方・安徽省』第88号，成文出版社有限公司印行，1970年に所収）